〈稲生物怪〉譚の生成―原典・『今昔物語集』「三善清行宰相、家渡語　第三十一」―

菅近　晋平

一　はじめに

近年、諸本・資料の発掘や紹介が盛んである、江戸時代中期の備後三次を舞台とする稲生平太郎と怪異をめぐる怪異譚。これは「今日一般に《稲生物怪録》の名称で呼ばれ、総称されている。しかしながら、稲生平太郎と怪異をめぐる怪異譚は口承もされている[*2]。この点を考慮すれば、《稲生物怪録》という名称では書承の世界を総称し得ても、口承の世界をも含み込んで総称することは出来ない。そこで、稿者はさらに俯瞰して稲生平太郎と怪異が語られる全ての話を「〈稲生物怪〉譚」と称す。

この〈稲生物怪〉譚、杉本好伸や東雅夫によって多くの諸本や資料が発掘・紹介されてきた。それらの成果を集成したものの一つに、三次市教育委員会編『改訂版　妖怪いま甦る―《稲生物怪録》の研究―』（三次市教育委員会、二〇一三）がある。諸本の特徴・関係の整理のみならず、稲生家の家系図を用いて〈稲生物怪〉譚を構成する事実と虚構を明かそうとする等の試みが本書において為され、本格的にその物語世界に迫ろうとする〈稲生物怪〉譚研究の端緒が開かれている。

杉本好伸をはじめとして精力的な諸本の発掘や紹介が為され、それらが整理され諸本の成立過程が明らかになりつつある。そして〈稲生物怪〉譚研究は今やその物語世界にまで迫ろうとしている。そういった〈稲生物怪〉譚研究の現在にあって、問題の一つは〈稲生物怪〉譚そのものの生成にあろう。多様な諸本を有す＝広く受容された〈稲生物怪〉譚は如何に生成したか。これは〈稲生物怪〉譚研究が扱うあらゆる問題に波及する問題であり、特に諸本の成立過程や受容と創造の問題を明らかにする点で非常に重要である。以上の重要性から、本稿では〈稲生物怪〉譚の生成の問題を明らかにすることを目的とする。

二　古態の〈稲生物怪〉譚

〈稲生物怪〉譚の生成の問題を明らかにするためには、ひとまず古態の〈稲生物怪〉譚を仮定する必要があろう。杉本の論考[*3]を参考にすると《稲生物怪録》諸本は、「文章中心」のものとして①知人の「聞き書き」形式（「柏本」）、②本人の「書き留め」形式（『三次実録物語』）、③平田篤胤及び門下生らが「柏本」の内容を軸に「校合整理」したもの（「平田本」）、「絵中心」のものとして①絵本、②絵巻と整理出来る。以上の諸本の系統の内、杉本は特に「柏本」に言及して「今日残存している諸本の〈年号〉記載から推測して、筆記者として「柏正甫」という人物名の確認できる系統のもの―天明三（一七八三）の序文を有する―が、どちらかと言えば、早期誕生の系統に属するものであることは、ほぼ推測可能である。」と述べている。

さらに、古態である「柏本」の諸本は序跋に注目すると、(1)柏正甫の「自序」だけが備わるもの、(2)柏正甫の「自序」「后記」とが備わるもの、(3)柏正甫の「自序」・竹馬(亭)主人の「后記」とが備わるもの、(4)柏正甫の「自序」・猗々斎竹能「跋文」・平田篤胤の「序文」「後記」の備わるもの、以上四種に分類される。以上の「柏本」諸本は様々な外題を有しているが、杉本の「平田篤胤が関与するようになって、外題が『稲生物怪録』に統一され」た、との言に鑑みれば、「柏本」の(1)〜(3)の形態に属するものを《稲生物怪録》の厳密な意味での古態として措定できる。

本稿においても、杉本の言う「柏本」の(1)〜(3)に属する《稲生物怪録》を古態の〈稲生物怪〉譚と仮定し論を進める。限定的には杉本好伸が紹介された『稲生怪譚[*4]』を、本稿の「柏本」の底本として扱う。これは(1)に属するものである[*5]。

三　江戸期怪異譚と『今昔物語集』

「柏本」は如何に生成したのか。全くの創作であるのか、あるいは染谷智幸が「近世(江戸時代)の文芸はパロディの宝庫である[*6]」、小島康敬が「江戸の文化事象の総体がパロディの上に花開いたといっても良い[*7]」と述べているような、原典を標的にした近世文芸の一つの手法であるパロディによって創られているのか、またあるいは浅井了意『伽婢子』を評して野田寿雄が「原拠が中国小説で、それを日本の話に変えるという手法は、その後一つ潮流となり[*8]」、坂巻甲太が「すぐれた翻案として近世怪異小説に一つの典型を創出した[*9]」と述べているような翻案の手法(これは原典が特定されなければならない場合もあるし、されなくても良い場合もある)によって成立しているのか。

以上の諸氏の指摘を受けるに、近世文芸においては原典の有無とその距離が一つの問題である。怪異譚〈稲生物怪〉譚はこのような江戸文芸の状況に置いた時、如何なる生成の様相を呈しているのだろうか。

江戸時代、怪異譚の生成・流布に大きな影響を与えた作品の一つに『今昔物語集』(以下『今昔』)がある。井原西鶴『武道伝来記』(貞享四年〈一六八七〉刊)、都の錦『御前於伽』(元禄十五年〈一七〇二〉刊)、落月堂操巵編『和漢(怪談)乗合船』(正徳三年〈一七一三〉刊)、厚誉が編述した『本朝怪事故事』(正徳六年〈一七一六〉刊)、近松門左衛門『柑狩剣本地』(正徳四年〈一七一四〉初演)等は、『今昔』を「神仏の霊験を奇談・怪談とし、本集を奇談・怪談の宝庫として注目した早い例」である[*10]。

渡辺は、以上に挙げた作品と『今昔』との接点を指摘しつつも

こうして本集享受の様子が散見されるものの、本集はまだ、一部の特別な者しか見ることのできない書物であった。本集が流布し、人々に広く知られるようになるためには、享保五年(一七二〇)、井沢長秀の『考訂今昔物語』の版行を待たなければならなかった。

と述べる[*11]。

続けて渡辺は、「『考訂今昔物語』刊行によって世に知られることになった本集は、近世の文学、とくに読本作家たちに大きな影響を与えた。本集は、奇談集として注目されたらしい。」として、都賀庭鐘『古今奇談繁野話』巻二(巻三十・14、明和三年〈一七六六〉刊)、『垣根草』巻一(巻十九・32)、上田秋成『雨月物語』(安永五年〈一七七六〉刊)、滝沢馬琴『南総里見八犬伝』(文化十一年〈一八一四〉刊)、『三七全伝南柯夢』(文化五年〈一八〇八〉刊)、『世界綱目』(寛政三年〈一七九一〉以前)の名を挙げる。そして近世後期以降は、国学者の研究対象となったり、本文研究がなされた[*12]。

〈稲生物怪〉譚の生成の問題を考えるときに注目したいのは、以上

のように『今昔』が受容・創造され流布した時期が、〈稲生物怪〉譚が（「柏本」天明三年〈一七八三〉柏正甫「自序」）流布・受容・創造される時代の直近より始まっている点である。ここに、〈稲生物怪〉譚「柏本」が、『今昔』所収話と、何らかの関係を切り結んでいるのではないかと疑われるのである。

〈稲生物怪〉譚「柏本」と『今昔』との接点の可能性から、怪異譚を多く収載する「巻二十七付霊鬼」に集められる全四十五話を探ってみると、「柏本」と非常によく似た説話がある。それが「三善清行宰相、家渡語第三十一」（以下『今昔』三善清行）。この説話、『考訂今昔物語』には所収されておらず、いわゆる本集にしか載っていない。この点は重要で、六「作者・読者の想定」で詳述する。

四　〈稲生物怪〉譚「柏本」と『今昔物語集』「三善清行宰相、家渡語　第三十一」

「柏本」とよく似た説話である『今昔』三善清行[*13]は、清行が「家渡り」（＝転居）した家に多くの怪異が起こり、最終的には翁の姿をした怪異の長によって怪異の原因と正体が明かされ、怪異が大学寮の辺りへ移って怪異が終息する、という展開を持つ話である。対して「柏本」は、平太郎の家に怪異が多く起こり、魔王によって怪異の原因と正体が明かされ、九州の方へ怪異が移っていくことによって怪異が終息する、という展開を持つ話である。

物語の展開・構成が類似していることが分かる。だが、単純に物語の展開・構成が類似しているのではない。細かく見れば、多くの類似点が指摘出来るのである。これら類似点を以下、指摘していく。

(1)怪異の場所・物語の舞台である家

『今昔』三善清行と「柏本」は多様な怪異の展開に多くの筆を割く物語である。これら多様な怪異の発生する場所、いわば物語の舞台を確認する。

■『今昔』三善清行

五条堀川ノ辺ニ、荒タル旧家有ケリ。悪キ家也トテ、人不住ズシテ久ク成ニケリ。

■「柏本」七月二日

（親類達が）「勝弥事、何分心もとなし。平太郎も屋舗を上、當分一類内ぇ一所に成て然るべし」と

『今昔』三善清行では四つの怪異が起きるが、いずれも傍線部に記されているように「旧家」の中、清行が転居した家の中で展開する。対して「柏本」では怪異の場所として平太郎の屋敷が設定されている。「柏本」における七月一ヶ月をみても怪異の場所としては平太郎の屋敷が中心で、平太郎の屋敷以外で怪異が発生するのは七月十三日の夜のみである（かつこの怪異は平太郎ではなく長倉が遭遇する）。

怪異の発生する場所である物語舞台が「家」という点、『今昔』三善清行と「柏本」で共通している。

(2)繰り返される一回性の怪異

『今昔』三善清行と「柏本」には様々な怪異が描かれる。これら怪異に類似点を指摘することが出来る。

『今昔』三善清行は、【組み入れに顔がある怪】、【乗馬する一尺程の者共の怪】、【美しい女が現れ怖ろしい顔に変じる怪】、【翁が現れる怪】、以上四つの怪異で構成されている。これらの内、前三つの怪異は、「見上」げた「組み入れに顔がある怪」を始点に、続く二つが

「亦、暫許有テ見レバ～」と展開し、ただ清行の眼前に現れ、消え去っていく。これらの怪異は、怪異の要素(主として怪異として描かれる何かとそのふるまい)相互に連関を持たず、また、各々の関係性が説明されることなく展開している。そして、最終的に翁によって「人ヲ愕ヤカシ候フ事ハ、翁ガ所為ニ非ズ。一両候フ小童部ノ、制シ宣ベ候ヘドモ、制止ニモ不憚ズシテ、自然ラ仕ル事ニヤ候フラム」と、人を脅かすために小童部が起こしたのだと説明される。翁の言葉によって初めて関連性のある怪異となる。

このような怪異の展開をもつものは、本朝・霊鬼全四十五話には見られない。大半は一つの怪異を語り、多くとも、光る怪異に遭遇する三十三話「西京人、見応天門上光物語」のように二つ。しかし三十三話は「応天門ノ上ノ層ヲ見上タレバ、真サヲニ光ル物有リ。」、「豊楽意ノ北ノ野ニ、円ナル物ノ光ル有ケリ。」と明らかに関連性がある怪異が展開している。本話の様に、関連性の無い複数の怪異を並べ、物語結末部で説明するという話形は特異といってよいだろう。

対する「柏本」は、七月一ヶ月が怪異で構成されている作品である。列挙していくことはしないが、【〈畳〉〈上がる〉怪】・【〈家〉〈鳴る〉怪】・【〈香炉・卓〉〈舞う〉〈仏壇に納まる〉怪】・【〈天井〉〈下がる〉怪】・【〈女の逆さ首〉〈笑う〉〈飛び来る〉】・【〈天井〉〈笑い声〉怪】・【〈火〉〈燃え上がる〉怪】・【〈人間の顔〉〈重なる〉〈笑う〉怪】以外は、怪異の要素を異にする、関連性の薄い一回性の怪異である。

『今昔』三善清行と「柏本」は、一回性の怪異が連続するという点で類似している。

(3)怪異に遭遇した清行と平太郎の冷静なふるまい

怪異に対する清行と平太郎のふるまいを、類似点として指摘出来る。まずは『今昔』三善清行を確認する。

■『今昔』三善清行

【組み入れに顔がある怪】

宰相、其レヲ見レドモ、不騒ズシテ居タレバ、其ノ顔皆失ヌ。

【乗馬する一尺程の者共の怪】

宰相、其レヲ見レドモ不騒ズシテ居タリ。

【美しい女が現れ怖ろしい顔に変じる怪】

奇異キ者カナト見ル程ニ、塗籠ニ入テ戸ヲ閉ツ。宰相、其レニモ不騒ズシテ居タルニ

怪異に動じず、怯えない清行が描かれていることが分かる。次に平太郎のふるまいの一例を挙げる。

■「柏本」

七月二日【畳の怪】

各顔を見合せ、桃夙に成て居けるか、平太郎は「草臥候へは、御免」とて、幮へ入けれは

七月十日【灯火の怪】

平太郎、「是は、例のにて有べし。然し、是は珎敷趣向なり」と、詠居内、其灯二尺斗に成、三尺に成、後には天井ぇ付、最早天井燃上るかと見へけれとも、平太郎さわがづ、「何故に、灯火、天井ぇ付へきいわれなし。例の目くらまし成」と合点して、捨置、見居たるに

七月十六日【天井が降りてくる怪】

目を覚し、見れは、天井ひきく成ぬ。されとも、一圓捨置、蚊屋へ入テ休ける。

七月二十九日【手の天井から下がる怪】

平太郎も、「此趣ならは、昼夜の別ちなく、色〳〵の事有べし。如何様にも如何様、天井に何ぞ住居して有かと思はれるとも、打捨置、弥、正躰顕はし、由だんするを待て、本意を達し、化物たいじせんもの」と、少し楽にして居けるこそ、不敵なる魂也。

平太郎の怪異への対応の基調を成すのは「休み」「蚊屋へ入」（「嚮に入」「閨に入」）「捨置」（「打捨置」）といった表現である。さらには怪異へ向かっていく姿勢・行動が見える。例外的な平太郎の様が描かれているのは、七月七日・擂木手の怪（怪異が消える朝まで寝る事が出来なかった。しかし最終的には「打捨置」く。）、七月十八日・老女の首の怪（怪異が消える朝まで寝る事が出来なかった）、七月二十一日・女の首の怪（朝まで怪異と格闘し、「大に草臥」れ、「腹立」てる。しかし、以降「捨置」く）、七月二十二日・正太夫の怪（怪異にだまされ切腹しかけ、後々までも「身の毛もよだつ」ように思う。）、七月二十四日・出火の怪（怪異にだまされ、「腹立」てる。）である。だが、これらの内平太郎が真に「騒」ぐのは二十二日の怪異のみで、他は、結果的には叶わなかったが「蚊屋へ入」て寝ようとしたり、物理的に調伏しようとする。二十四日については「騒」いでいるが、怯えたり怖がってはいない。恐怖する等といった意味で平太郎が「騒」ぐことは非常に稀で、驚き逃げ惑うなどということは全くない。

清行と平太郎は、怪異を前にして動じることなく冷静なふるまいをとる、という点で非常に近似した人物である。

（4）『今昔』三善清行・翁と「柏本」・魔王／物語展開（翁・魔王登場→主人公と怪異の問答〈身分身柄を問う問答→詰問的問答→怪異主導の語り〉→大勢の眷属を伴った怪異の退去・移動→怪異の終結）

翁や魔王が現れて後の場面では、怪異と主人公の問答の中で怪異の理由や正体が明かされ、怪異が終結していく。それまでに展開した怪異が回収される、物語上非常に重要な場面である。この場面に『今昔』三善清行と「柏本」の類似点があるように思われる。ここでは、『今昔』三善清行の翁・「柏本」魔王が登場して以後の場面（以後『今昔』翁・「柏本」魔王）に焦点を当て、詳細に見ていく。

『今昔』翁登場以下の場面は、細かく次の如く展開する。

■『今昔』翁

〈翁の登場〉

①浅黄の上下を着した翁が登場する。

〈清行と翁の問答〉

②清行が翁に「何事申ス翁ゾ」と問う。

③翁が、清行がこの家に住んでいることについて「愁へ」を申すために現れたと言う。

④清行が、「汝ガ愁へ頗ル不当ズ」と否定し、「其ノ理、〇（†に遣）ニ申セ」と言う。

⑤翁が清行の意見に納得し、怪異の正体が「一両候フ小童部」であった事を明かし、大学寮の辺りに移るのはどうかと言う。

⑥清行がそれを認め、一族全員を連れて行けと言う。

⑦翁が返答をすると同時に、四五十人の声で返答がある。

〈後日談〉

⑧夜が明けて清行は家に帰り、その後慣例に従って家渡りをした。
⑨その後、全く怪異は無かった。

「柏本」魔王登場以下の場面は、細かく次の様に展開する。

■「柏本」魔王

〈魔王の登場〉

①大きな手が平太郎を捕らえようとする。
②平太郎が手を刀で切りつけようとするが、手は引っ込む。
③障子から「夫ぇ参らん。先、待よ」と大声がする。
④花色の帷子の上下を着した魔王が登場する。
⑤平太郎が切りつける。
⑥後ろの壁へ消え入り、笑いながら「御嘶申事有て、参りたり。刀を納め、しつまられよ」と言う。
⑦平太郎は、仕留めることが難しい、と感じ「先、何を云か聞へし」と刀を納め、居直る。

〈平太郎と魔王の問答〉

⑧魔王が平太郎に「其御方は氣の強き者也」と言う。
⑨平太郎は魔王に「其方は何者ぞ」と問う。
⑩魔王が「我は山本五郎左衛門と云者也」と名乗る。
⑪平太郎は「夫は、人間の名也。其方は、人げんにては有まじ。狐か狸か、性躰を申せよ」と言う。
⑫魔王は、「我は、狐狸の類にはあらづ」と言う。
⑬平太郎は「何にもせよ本躰を顕せ」と言う。
⑭魔王は「我は、日本にては山ン本ト五郎左衛門と云者也成ほど、我はにんげんにもあらづ、魔王也」と言う。
⑮【蚯蚓の怪】が起こる。

〈魔王による怪異の理由明かし〉

⑯魔王は、平太郎に怪異があった理由、自身の役割、怪異が一ヶ月に渡って起きた理由を告げる。さらに、これから九州へ下る事、それ故、以後平太郎に怪異がないであろう事、もし怪異が起きたとすれば自分を呼ぶことを平太郎に言い、「長ぇの滞留忝なし」とお辞儀をする。
⑰平太郎もお辞儀をする。

〈魔王帰去〉

⑱魔王が「我れ帰り見送りたまへ」と言い、席を立つ。
⑲平太郎も後について庭へ出る。
⑳魔王がお辞儀をする。
㉑平太郎もお辞儀をするが、押しつけられ動く事が出来ない。
㉒少し押しつける力が弱まったので起き上がって魔王の方を見る。
㉓庭の中に駕籠等、大勢の者共が来ており、魔王はその駕籠に乗り込み、大勢を引き連れて空へ飛び、消えていった。
㉔平太郎は「夢にてもあらんか」と、敷居の溝に扇子を印として入れ置き、蚊帳に入って寝た。
㉕翌朝、前日の扇子を見ればそのままにあり、庭にも爪で掻いた跡があった。

〈後日談〉

㉖平太郎は兄の家へ行き、前日の事を語った。
㉗しばらくは油断をせずに居たが、その後は全く何事も無かった。

右に翁・魔王登場以後の流れを追った。『今昔』三善清行と「柏本」を対照させた際、物語展開に類似点を指摘出来る。怪異の登場→主人公と怪異との問答→怪異の終結という展開もさることながら、怪異の理由と正体(③⑤)を語る『今昔』翁の姿は、同様に怪異の理由と正体(⑩⑫⑭⑯)を語る「柏本」魔王の姿と重なる。このように、右に挙げ

た『今昔』翁と「柏本」魔王の展開・場面には多くの類似点を指摘することが出来る。これら物語展開・場面上の類似点を、次に展開・場面を整理した上で具体的に指摘する。傍線を付した箇所は、上段に示した場面を端的にあらわし、『今昔』翁・「柏本」魔王の類似点として明確に指摘出来る場面である。

■表一・『今昔』三善清行・翁と「柏本」・魔王登場以後の展開比較

展開	『今昔』	「柏本」
翁・魔王の登場	①	①～④～⑦
主人公主導の問答	②③	⑧⑨⑩
身分・身柄を問う問答		
主人公と怪異の問答	④⑤	⑪⑫⑬⑭
詰問的問答（怪異の返答に対する否定と追求）		
		⑮【蚯蚓の怪】
怪異主導の語り	⑤⑥	⑯⑰
大勢の眷属を伴った他所への怪異の退去・移動	⑥⑦	⑱～㉓～㉕
怪異の終結	⑧⑨	㉖㉗

以上を見れば『今昔』翁と「柏本」魔王は展開・場面において多く重なっていることが分かる。『今昔』翁と「柏本」魔王は怪異の登場、主人公から怪異に対する身分・身柄を問う問答と詰問的問答、怪異主導の語り、大勢の眷属を伴った怪異の退去・移動、怪異の終結という展開と場面を同じにしている。

(5)『今昔』翁・「柏本」魔王のモチーフ(人間)と装束(薄青色の、「浅黄上下」と「花色」の「上下」)

翁・魔王登場の場面において、『今昔』翁は「浅黄上下着タル翁」と描かれる。一方、「柏本」魔王は「背の高き、鴨居ゟ一尺斗も高く、至極肥たる大男の出来るを、つくゞ〳〵と見れば、甚、能き人ぴん也。花色の帷子と見へ」と描かれる。

翁と魔王は共に「翁」と「大男」である魔王として、翁・魔王の登場までに展開する一見してそれと分かる多くの怪異とは異なり、怪異に見えない〈人間〉がモチーフであるところが共通している。

また、翁の「浅黄上下着タル」という服装描写に注目すると、それに対応する「花色の帷子と見へ、上下を着」という魔王の服装描写を類似点として指摘出来る。

翁の身につけている上下[*14]は「浅黄」である。この「浅黄」は『今昔』三善清行の注[*15]において「薄青色」と解されている。対する魔王の上下の「花色」とは、「花の色」あるいは「薄いあい色」である[*16]。「柏本」系統の詞書きを持つ絵巻を見てみると、藍色の上下を身につけた魔王が描かれていることが分かる[*17]。則ち、「柏本」における「花色」は薄い藍を想定していると考えられる[*18]。なお、「帷子」は「上下」と意味的に重複している[*19]。

以上、翁と魔王のモチーフと着衣の色合いを確認した。共に〈人間〉をモチーフとし、薄い青色(＝「浅黄」「花色」)の「上下」を着している点を類似点として指摘できる。

(6)怪異の理由と正体を語る『今昔』翁・「柏本」魔王

(4)で『今昔』と「柏本」の展開・場面における類似点を指摘した。今少し細かく触れておきたい点が、『今昔』翁と「柏本」魔王が語る

内容と役割。『今昔』翁は清行に、次の様に怪異の理由と正体を語る。

■『今昔』翁

場面③

年来住候ツル所ヲ、此ク令居給ヘバ、大キナル歎キト思給テ、愁ヘ申サムガ為ニ参テ候フ也

場面⑤

只、昔ヨリ住付テ候フ所ナレバ、其ノ由ヲ申ス也。人ヲ愕ヤカシ候フ事ハ、翁ガ所為ニ非ズ。一両候フ小童部ノ、制シ宣ベ候ヘドモ、制止ニモ不憚ズシテ、自然ラ仕ル事ニヤ候フラム。

翁は、「一両候フ小童部」が清行を恐れさせ追い払うために怪異を起こしたのだ、と怪異の理由と正体を語る。このような翁は、それまでに展開した一回性の、関連性が薄い怪異群を、怪異の理由と正体を語ることで結ぶ役割を担っている。

付言しておくならば、怪異の正体について翁は明かす必要はなかった。清行が「其ノ理、〇(†に遣)ニ申セ」と詰問したのは、翁を始めとする怪異が家を領有する理由であり、正体を明かすことではない。怪異の正体を詰問しなかったのは、清行が翁を怪異の正体とみたからか、あるいは怪異の理由を語ることの内に怪異の正体を明かすことが含まれているからもしれないが、ともかく翁が怪異の正体を語ることは、清行の要求・期待を越えた出来事である。この、清行の要求を越えて自ら怪異について説明していく場面を「怪異主導の語り」と捉え、整理している。

対する「柏本」魔王もまた、怪異の理由と正体を語る。

■「柏本」翁

場面⑯

扨ゝ、汝は氣丈もの也。去ながら、汝氣丈故に、今迫、難儀せしぞかし。汝、當年十六歳にて、難に逢ふ年月の来れる也。十六歳には限らづ、難にあふ年月、生れによりて有ものなり。其人にあふ時は、驚かし行を、我ぎやうとす。我、汝に比熊山にて行合たりしに、追付け、汝が難に逢ふ月日を待て、たぶらかし通らんと思ひしに、汝氣丈にて、驚き恐れず。夫ゆへ、おもはず、日枚を送りし也。又、外ゟ聞求て、来る人有れ共、是は其難にあふ人にあらねば、捨置たり。乍去、しゐ求て、出合者は、難を招く道理也。終に、其身を求て〇(イに丸)と也成。是〇(ホ)は、我なす所にあらづ、自から難をもとむる也。汝は、當年、難に逢ふ月日の来りし故也。其月日にたぶらかしたれども、驚かさる故、此方の修行の妨となりて、思はず日枚掛りし也

傍線部に怪異の正体が「我」であり、怪異の理由が、平太郎が「難に逢ふ月日」にあったためであった、と語られている。この魔王の言葉によって、一ヶ月に渡って発生した関連性の薄い様々な怪異は、平太郎に「難」をもたらすために魔王が引き起こしたのだ、と繋がる。

この魔王の語りもまた、「怪異主導の語り」となっている。右の引用場面の前場面で、平太郎は眼前に現れた「大男」の正体を詰問していくものの、怪異の理由に関しては言及していない。七月一ヶ月を通してもみても、怪異の正体への関心が七月一日・十六日・二十九日に描かれているのに対し、怪異の理由への関心は一度も描かれていない。その意味で魔王の、怪異の理由を語ることは平太郎の関心・要求をこえた出来事であり、「怪異主導の語り」となっている。

怪異の理由と正体を語り、多発する一回性の怪異を繋ぎ、清行や平太郎の要求を越えて自ら語っていく『今昔』翁と「柏本」魔王の姿を類似点として指摘することが出来る。

五　『今昔』三善清行を原典とする「柏本」

以上、『今昔』三善清行と「柏本」の類似点を指摘した。今一度列挙する。

(1)物語舞台・怪異の場所としての「家」
(2)繰り返される一回性の怪異
(3)怪異に遭遇した清行と平太郎の冷静なふるまい
(4)『今昔』三善清行・翁と「柏本」・魔王／物語展開（翁・魔王登場→主人公と怪異の問答〈身分身柄を問う問答→詰問的問答→怪異主導の語り〉→大勢の眷属を伴った怪異の退去・移動→怪異の終結）
(5)『今昔』翁・「柏本」魔王のモチーフ（人間）と装束（薄青色の、「浅黄上下」と「花色」の「上下」）
(6)怪異の理由と正体を語る『今昔』翁・「柏本」魔王

細かくは扱わなかったが、清行は家渡りをするということで「親キ族」に「強ニ悪キ家ニ渡ラムト為ル、極テ益無キ事也」と制止を受けている。「柏本」でも同様に、怪異が起きた後に、これ以上家に居ない方がいいのではないかと、平太郎が親族に制止を受ける場面が見られる[20]。そして清行・平太郎共にその制止を受け付けない。怪異の発生より前か後かという違いはあれど、同じ場面が設定されていることが分かる。

また、(1)物語舞台・怪異の場所の「家」に関して、「悪キ家」として評判である『今昔』三善清行に対し、「柏本」では次の描写が見られる。

■「柏本」・四日

三次麦蔵屋敷には化もの出て、夜中家鳴りの音抔、外へも聞ゆる」との取沙汰ゆへ、門前見物人多し。其上、かゝる評判は、尾に鰭を付るゐるひなれは、さま〳〵に申なして、或は生霊、死霊、狐狸、評判さま〳〵也。殊更三夜まで續て、誰渠も夜伽に行、屋鳴り抔は、見及ひし事なれは、彼処へよりても、爰の所よりても、只麦蔵屋敷のはなしのみにて、更に他のものかたりなし。婦人幼童は、暮てよりは手水等にも出る叟を得ず

「柏本」では、平太郎の家が、怪異の発生する「麦蔵屋敷」として評判となっていることが分かる。以上の、物語舞台の「家」そのものの評判もまた類似点としてあげることが出来よう。

さて、これらの類似点を見渡したとき、場面・展開や構成に関わるものが大半であることが分かる。だが、語彙は一つとして同一ではないということにも気付かされる。類似した展開・構成ではあるが、語彙選択のレベルでは異なっている。

しかし、一つだけ『今昔』三善清行と「柏本」に共通する言葉を見いだすことが出来る。それは『今昔』三善清行の「三善清行宰相」の「三善」と、「柏本」冒頭「備後三次郡の住人、稲生武左衛門と云ふものあり。」の「三次」である。表記は異なるが、どちらも“みよし”という音として同一。そしてこれらの語は、「三善」の清行、「三次」の住人、として物語主人公を説明する点で役割を同じにしている。表記は異なるが、音と役割が同じこれらの語彙相互には、言葉遊び的連関を感じ取ることが出来る。

けれども、なお厳密には同一の語彙ではない。結局、『今昔』三善清行と「柏本」に同一の、共通した語彙を見いだすことは出来ない。ひたすらによく似ているのである。

以上の『今昔』三善清行と「柏本」の比較に鑑みれば、〈稲生物怪〉譚の原典が、確実に『今昔物語集』「三善清行宰相、家渡語　第三十

一」であることが分かる。そして原典としながらも、構成・展開をのみ活かし人物や場所等々をそっくり変換する換骨奪胎の手法が採られていることにも気付く。つまり〈稲生物怪〉譚「柏本」は、『今昔』三善清行を原典とする、近世流行のパロディや翻案の手法によって生成した作品[*21]なのである。

六　作者・読者の想定

〈稲生物怪〉譚は『今昔』三善清行を原典とする作品である。この三善清行説話が収載されている『今昔物語集』の本文は近世、井沢長秀『考訂今昔物語』（前編は享保五年〈一七二〇〉、後編は同十八年〈一七三三〉）によって広く世間に認知されることとなる。この作は、本朝部のみで、読者の便宜のためにさまざまな手が加えられ、読みやすさのために、空格や欠文の補入、漢字片仮名交じり文から平仮名交じり文への変更、挿絵の挿入、割注の付加などが行われているもの。また、主題の明確化のために、題名の変更、本文の省筆・略述、平易な文言への改編がなされている[*22]。

この『考訂今昔物語』は『今昔』原本の本文と著しく異なっているという点で難のあるものであるが、版行されたことで『今昔』の流布・認知を広めたという点では一定の役割を果たしたはずである。だが『考訂今昔物語』には、原本巻二十七第三十一話に収載されている三善清行説話は載っていない。この説話が収載される『今昔物語集』は水野忠央「丹鶴叢書」の『今昔物語』（嘉永三年〈一八五〇〉）を待たなければならない。では天明三年（一七八三）付近に生きた〈稲生物怪〉譚「柏本」作者は、如何にして『今昔』三善清行を了解したのか。

『考訂今昔物語』に載らない『今昔』三善清行を了解するには、原文に忠実な『今昔物語集』を披見する必要がある。原文に忠実な『今昔物語集』の一つとして、写本の形態をとる『今昔』が考えられる。渡辺麻里子、千本英史の先行研究[*23]によると、国学者・漢学者を中心[*24]に写本『今昔物語集』が流通していた実態を掴むことが出来る。

以上の、三善清行説話を収載する『今昔』とその流布・享受の実態をふまえると、〈稲生物怪〉譚「柏本」の作者が、おそらく国学者周辺の人間であったであろうという推測が出来る。

加えて、読者に関しては今井秀和「篤胤のサロン、静山のサロン」[*25]と題された一節が参考になる（傍線＝菅近）。

平田篤胤を焦点とした「サロン」的な繋がりである。文政の頃、篤胤のもとには、塙保己一に国学を学び『群書類従』を纏める作業にも従事した幕府右筆の屋代弘賢、薬種商長崎屋の跡取りで博識の蔵書家だった山崎美成、篤胤と同じく本居宣長没後の門人である伴信友、水戸藩士の立原翠軒、『防海策』、『経済要録』、『農政本論』などを著した佐藤信淵、反射式望遠鏡の制作も行っていた鉄砲鍛冶の国友能当（一貫斎）らの知識人が集まり、仙童寅吉[*26]による言動を肯定的に捉えていた。

中でも屋代は、篤胤の人脈を外に広げる役割を果たした人物であると言える。元水戸藩士の加藤曳尾庵による随筆『我衣』には寅吉の記事があるが、そこにも加藤の知人だった屋代の介在があったとおぼしい。

傍線部に「平田篤胤」「屋代弘賢」の名が見える。この両名は《稲生物怪録》写本の序跋に名が見え、確実な〈稲生物怪〉譚の受容者。そしてこのサロンには国学者の名も見える。特に『今昔』本文と密接に関係する伴信友は重要である。おそらく〈稲生物怪〉譚、特に《稲生物怪録》の読者は、このサロン周辺に数多くいたはずだ。

また〈稲生物怪〉譚は、平田本が明治四十四年（一九一一）に『平田

篤胤全集』の第三巻に所収・刊行されるまで、刊行されることはない[27]。専ら写本として流通したのであり、屋代弘賢や平田篤胤等の知識人層に伝わる写本を披見・書写可能な人物が読者となってくるが、だとすればやはり彼らのサロン周辺の知識人層が読者となろう。

また、今一度作者に思いを馳せるならば、忘れてはならないのは、〈稲生物怪〉譚に、誤りを含みながらも[28]、実在する人物の名など、確かに三次の情報が含まれている点。〈稲生物怪〉譚「柏本」の作者は国学者周辺の人物であり、同時に三次の情報・言説を利用出来る人物でもある。江戸屋敷に住まいする元三次藩関係者、現広島藩士の知識人であろうか。〈稲生物怪〉譚「柏本」生成の瞬間・場が、広島や三次ではなく、江戸屋敷・知識人層間にあったであろうことが実感を伴って想像されるのである。

七　おわりに

〈稲生物怪〉譚「柏本」は、『今昔』三善清行を原典とする作品である。このことは、〈稲生物怪〉譚の受容と創造の様態を具体的に示す。すなわち、まず作者読者の想定を可能にする。

また「柏本」が、『今昔』三善清行を原典としながらも、百物語と化け物退治を摂取し、虚構と事実の混在する三次の情報で構成されているという、「柏本」のより具体的な生成の様相である創作の方法も明らかになる。これは近世江戸文芸における「柏本」の位相に迫ることを可能にする。

さらに原典の特定は、なぜ〈稲生物怪〉譚は多種多様な写本を有しているのか＝広範囲の受容と創造を可能にしている〈稲生物怪〉譚の魅力とは何か、という物語世界に関わる問いにも迫り得る。ある特定のサークルに所属する作者・読者＝知識人にとっての魅力とは何か。彼らが感じ取ることが出来る魅力と言い換えても良い。それはおそらく、「柏本」と『今昔』三善清行を重ね合わせながら享受出来る翻案・パロディ遊技の空間での魅力となろう[29]。

稿者はその魅力を、「柏本」と『今昔』三善清行との比較対照によって、「柏本」の翻案の妙[30]に求めた。さらに、「柏本」と近世百物語作品の比較対照を行った。近世百物語言説における物語の展開・構成と百物語作品に描かれる怪異を整理した上で、「柏本」の位相を明かし、「柏本」の魅力が、百物語言説の操作の妙[31]にもあることを特定した。以上の、「柏本」の方法や翻案の具体、位相の詳細に関しては別に報告したい。

［付記］
本稿は菅近晋平「〈稲生物怪〉譚の受容と創造」（広島大学大学院二十七年度修士論文）の第一部第二章「〈稲生物怪〉譚の生成」と結章の一部をもとに、加筆修正を行ったものである。修士論文作成において指導して下さった先生方に、厚く御礼申し上げる。

*1 三次市教育委員会編『改訂版　妖怪いま甦る―《稲生物怪録》の研究―』（三次市教育委員会、二〇一三、）二頁。
*2 菅近晋平「「三次町国郡志」〈稲生物怪録〉の位置」（広島大学大学院教育学研究科国語文化教育学講座『論叢　国語教育学　第十一号』所収）
*3 三次市教育委員会編『改訂版　妖怪いま甦る―《稲生物怪録》の研究―』（三次市教育委員会、二〇一三）五～八頁。
*4 杉本好伸「翻刻『稲生怪譚―第一巻―』（安田女子大学大学院文学研究科紀要第 8 集、二〇〇三年三月）、「翻刻『稲生怪譚―第弐巻―』（安田女子大学大学院文学研究科紀要第 9 集、二〇〇四年三月）、「翻刻『稲生怪譚―第三巻―』（安田女子大学大学院文学研究科紀要第 10 集、二〇〇五年三月）に翻刻されている。これは柏正甫の「自序」だけを有するものである。
*5 『稲生怪譚』には、柏正甫の序文の前に、書簡二通と『黄帝内経霊樞』の一節が記されている。
*6 染谷智幸「近世文芸においてパロディとは何だったのか」（ツベタナ・クリステワ編『パロディと日本文化』〈笠間書院、二〇一四〉所収）二七三頁。
*7 小島康敬「「性」と「聖」とを繋ぐ笑い」（ツベタナ・クリステワ編『パロディと日本文化』〈笠間書院、二〇一四〉所収）二九四頁。
*8 野田寿雄「怪異小説の系譜と秋成」（全国大学国語国文学会監修『講座　日本文学８　近世編Ⅱ』〈三省堂、一九六九〉）四〇頁。
*9 坂巻甲太「近世怪異小説の虚構―翻案を基軸として―」（『日本文学』、日本文学協会、一九八六）
*10 小峰和明編『今昔物語集を学ぶ人のために』（世界思想社、二〇〇三）、「Ⅴ　享受・研究・創作」、渡辺麻里子「4　近世」。
*11 同前注。
*12 同前注。次のように述べている。長くなるが引用する。「伊勢貞丈の『今昔物語問答』（天明元年〈一七八一〉奥書）が、その先駆けといえよう。本集巻一・七・九より故事十五条を抄出し、難語に註釈を施した。小山田（高田）与清（一七八三～一八四七年）は『旧本今昔物語読法』（『今昔物語訓』）で本集の難字に訓法を註釈した。また、『今昔物語抄録』では、人名・地名索引（巻三・四）を偏している。『日本霊異記攷証』で知られる狩屋棪斎（一七七五～一八七九年）は、同じく本集も調査したらしい。門人の岡本保孝（一七九七～一八七九）がそれを引きつぎ、さらに資料を博捜して加筆、『今昔物語出典攷』を記した。この書は後に、芳賀矢一著『攷証今昔物語集』（大正三年）の基礎資料となる。尾崎雅嘉は『群書一覧』（享和二年〈一八〇二〉刊）のなかで、「今昔物語」と「旧本今昔物語写本廿九巻」について触れている。また、本文研究も進められた。伴信友は、天保二年（一八三一）に本集十八冊を書写し、天保四年（一八三三）と弘化元年（一八四四）の二度に渡って鈴鹿本『今昔物語集』を自ら校合した。信友は本集を精読し、『神名帳考証』『験の杉』などの多くの著書に、本集の本文を博捜し、典拠として引用している。」
*13 森正人校注『今昔物語集五　新日本古典文学大系 37』（一九九六、岩波書店）「三善清行宰相家渡語第三十一」を底本とした。
*14 上下とは「平安時代から室町時代にかけて、狩衣・水干・直垂・素襖などの上衣と袴との地質・色合いの同じものの称。「浅黄の―着たる翁の」〈宇治拾遺・十二・二二〉」である。（松村明　山口明穂　和田利政編『旺文社　古語辞典　〔第九版〕』〈旺文社、二〇〇一〉「かみしも」項〈三五〇頁〉参照）
*15 森正人校注『今昔物語集五』（岩波書店、一九九六）一四八頁。
*16 松村明　山口明穂　和田利政編『旺文社　古語辞典　〔第九版〕』（旺文社、二〇〇一）「はないろ」項参考。一〇三九頁。

*17 杉本好伸編『稲生物怪録絵巻集成』（国書刊行会、二〇〇四）収載されている広島県立歴史民俗資料館所蔵『稲亭物怪録』、慶應義塾大学三田メディアセンター所蔵『稲亭物怪録』参照。一六四～一六六頁。

*18『三次実録物語』（三次市教育委員会編『改訂版妖怪いま甦る―《稲生物怪録》の研究―』（三次市教育委員会、二〇一三）所収）では「浅黄小紋」となっており、杉本好伸編『稲生物怪録絵巻集成』（国書刊行会、二〇〇四）に載る「実録」系の絵巻である堀田家所蔵『（無題箋）稲生物怪録絵巻』、吉田家所蔵『稲生武太夫一代記』、井丸家所蔵『怪談之由来併画』や、絵本である宮内庁書陵部所蔵『稲生逢妖談』、西尾市岩瀬文庫所蔵『稲亭物怪図記』、東北大学附属図書館（狩野文庫）所蔵『稲生平太郎物語』は濃淡に差はあるものの基本的には青色藍色で魔王を描いている。近世同時代的にも「花色」がそのような色として受容されていたことが分かる。

*19「帷子」とは「近世、夏に着る、麻や木綿などで作った単衣である。」松村明　山口明穂　和田利政編『旺文社　古語辞典　（第九版）』（旺文社、二〇〇一）「かたびら」項参考。三二一頁。

*20 二日に「勝弥事、何分心もとなし。平太郎も屋舗を上、當分一類ぇ一所に成て然るべし」と親類に指摘を受け、十六日にも親類から「先頃ゟ、其方宅には、怪敷叟有て、各、夜伽に行けれ共、逃かへる人多し。其方、気丈にて、一人暮す事、何れも驚入也。去なから、万一、あやまち有ては、其身は勿論、『一家内見捨置し』と云れては、其分、相立かたし。今日ゟ一類内、何方へ也共、滞留致し、しばらく様子を伺て可然」と退避を提案される。

*21 本稿において〈稲生物怪〉譚「柏本」が『今昔』三善清行のパロディであるのか、翻案であるのかという点には細かく触れない。「柏本」は『今昔』三善清行を知らずとも読むことが可能であるし、同時に、知識人層には原典を特定して読むことを要求しているとも考えられるからだ。

*22 小峰和明編『今昔物語集を学ぶ人のために』（世界思想社、二〇〇三）、「Ⅴ　享受・研究・創作」、渡辺麻里子「4　近世」

*23 渡辺麻里子は前注同。千本英史は、小峯和明編『今昔物語集を読む』（吉川弘文館、二〇〇八）「Ⅲ　その後の今昔物語集」「一　近世の今昔物語集発見　国学者と出版」参照。

*24 井沢長秀、伊勢貞丈、小山田与清、狩屋棭斎、岡本保孝、木村正辞、横山由清、伴信友、水野忠央、林羅山、藤井懶斎、運敞、狐山居士、大島武好、落月堂操巵、都賀庭鐘、滝沢馬琴、速水行道、林靖、元正上人、都の錦、厚誉、上田秋成、井原西鶴、近松門左衛門、本居宣長、尾崎雅嘉の名が挙がっている。

*25 今井秀和「江戸の知識人と〈怪異〉への態度：“幽冥の談”を軸に（怪異を媒介するもの）―（語る・あらわす）」（東アジア怪異学会編『【アジア遊学 187】怪異を媒介するもの』〈勉誠出版、二〇一五〉）

*26「仙童寅吉とは、天狗に連れられて山中の異世界に行き、神通力を身につけたと公言する少年である。親元を去り、はじめは山崎美成の元にいたが、幕府右筆の屋代弘賢からこの話を聞いた平田篤胤は寅吉に強い興味を示し、半ば強引に自らの屋敷へと連れ帰った。そして様々な問答を重ねた上で、天狗の棲まう仙境の詳細な記録『仙境異聞』をまとめたのである。」（今井秀和注 25 論文）

*27 吉田麻子「『稲生物怪録』の諸本と平田篤胤『稲生物怪録』の成立」（早大文学部編「近世文芸　研究と評論」、早大文学部、一九九八）。ここで吉田麻子は平田本に関して「表紙に「上木用　門外不出」と書かれた板下であり、奥付に一度板元に預けられた旨が記されているが、板下本として残っていることや、板本が一冊も見つかっていないことから、板行はされなかったと考えられる。」と述べている。なお、「安政六年（一八五九）十二月板元預人　書物問屋紙屋徳八」の記がある。

*28 三次市教育委員会編『改訂版　妖怪いま甦る―《稲生物怪録》の研究―』（三次市教育委員会、二〇一三）十六～十八頁。

*29 稿者は、〈稲生物怪〉譚「柏本」の第一の読者が、近世知識人層にあろうと考えているが、「柏本」は原典を了解しておらずとも読むことが可能である。このように、原典を離れてそれとして成立している〈稲生物怪〉譚「柏本」の魅力に関しても、具体的に考察する必要がある。

*30 稿者は「柏本」に関して、物語世界が『今昔』三善清行の翻案であるだけでなく、柏正甫「自序」もまた、三善清行の著作『善家秘記』にみえる清行の著述態度の翻案であると考えている。

*31 限定的には、百物語言説を受けつつも、それを奪胎した物語構成・展開、怪異。

（近畿大学附属広島高等学校・中学校東広島校）